

金銭観の研究

金銭教育の理念と実践

浅野 純一

はじめに

われわれの生活や経済社会は、金銭によって支えられている。その金銭のもつ力が大きいだけに、人びとはこれを貴び、時にこれを怖れる。金銭に対する拝金主義と排金主義との異なった考え方がみられるのは、このためである。しかし、この二つの見方はいずれも、金銭の価値や役割を、正しく理解したもとはいえない。金銭がもつ価値や役割を正しくとらえ、そして活用していくこと、そこから健全な金銭観が育まれてこよう。¹⁾

金銭教育は、幼児期からの子どもを対象に、清潔で健全な金銭観の育成をねらいとする、教育実践活動である。²⁾

本論では、金銭教育の基本をおさえながら、各地の金銭教育研究校が取り組んでいる研究実践の状況を検討し、併せていくつかの課題について考えてみたい。

1. 金銭教育の意義

今、子どもたちは、豊かな物に囲まれてその

ありがたみを知らず、たくさんのごづかいをもらうがお金の価値がわからない、といわれる。

このような子どもの生活実態から、生活に必要な物はお金を支払って得られるものであること、そのお金は働いて手にするものであることを、まず教えなければならない。

こうして、身近かにある物やお金の価値や役割を理解させ、お金は汗して働くことによって得られる勤労の対価であると教えることが、金銭教育の原点であり、知的側面といえる。

このように、物やお金に対する知的理解を通して、子どもたちは、感謝すること、思いやりの心など、大切な資質を育てていくことになる。このことは、金銭教育がねらいとする心情的側面である。

つまり、金銭教育は、物やお金との関わりを通して、豊かな人間性を育て、健全な金銭感覚を身につけた、望ましい人格の形成を目指すものであり、これを究極的な目標といえることができる。

平成4年度から実施されている小学校の学習指導要領および5年度から実施の中学校の同要領においても、この金銭教育がねらいとする

1) 金銭についての拝金主義と排金主義とともに、日本人にとくにみられるデリケートな金銭観の形成要因としては、次のような諸説がみられる。農業中心の経済社会が長く続いたこと、農村社会では金銭を必要としなかったこと、欲望を抑圧された封建社会が続いたこと、町人社会の興隆が金銭観を変えたこと、ホンネとタテマエを使い分けること、日本文化の特異性ということ、金銭の魔性をおそれたこと、などである。「金銭観の研究 序説 拝金主義と排金主義」豊橋短期大学研究紀要 第13号 1996.3

2) 金銭教育の普及推進に当たっているのは貯蓄広報中央委員会(事務局日本銀行)である。同委員会(以下貯広委)では、昭和27年の発足以来、子どもの貯蓄心育成に努めてきたが、昭和40年代以降、金銭教育の普及に努めている。昭和48年には、新たに金銭教育研究校制度を発足させた。金銭教育研究校は、「児童生徒の正しい金銭観あるいは物に対する正しい価値観の育成をはかるための具体的かつ効果的方法を研究すること」を目的としている。この研究校は全国にわたり、その数は延2,256校(平成8年度現在)に達している。

貯広委では、これら研究校による研究実践の成果をもとに、各種の啓発資料を作成(資料文献別添),それぞれの研究校を核として、さらに広く地域の学校、家庭へと、金銭教育の普及推進活動を展開している。

ころを、学校教育全体において指導するよう求めている。小・中学校の学習指導要領の中で、とくに金銭教育と関わりの深い内容としては次の点があげられる。

(小学校)「家庭」では、買物の仕方や金銭の使い方などが分かり、計画的に生活する必要があることを理解できるようにする(6年)、「道徳」では、健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする(1・2年)、みんなが使う物を大切に、約束やきまりを守る(1・2年)、働くことの大切さを知り、進んで働くようにする(3・4年)、働くことの意義を理解するとともに、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つように努める(5・6年)。また「特別活動」の「学校行事」では、勤労の尊さや生産の喜びを体得するとともに、社会奉仕の精神を涵養する体験が得られるような活動を行うこと、とある。

(中学校)「道徳」では、望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度と調和のある生活をするようにする。勤労の尊さを理解するとともに、社会への奉仕の気持ちを深め、進んで公共の福祉と社会の発展のために尽くすように努める。

また「特別活動」の「学校行事」では、勤労の尊さや意義を理解し、働くことや創造することの喜びを体得し、社会奉仕の精神を養うとともに、職業や進路にかかわる啓発的な体験が得られるような活動を行うこと、とある。

2. 金銭教育の研究事例

(1) 研究テーマ

金銭教育について、その具体的かつ効果的な方法の研究実践と取り組んでいるのが金銭教育

研究校である。研究校は、その目的に則して研究テーマを設け、1年または2年のいずれかの期間、自由な研究を行うこととなっている。研究校は小学校を中心に、幼稚園から中学校を対象とし、それぞれの子どもの発達段階に応じた取り組みを行っている。

ここでは、平成6~7年度に研究実践を行った幼稚園、小学校および中学校の研究報告をもとに、金銭教育のねらいとするところを明らかにしてみたい。³⁾

(幼稚園) 小学校を対象とする金銭教育研究校が昭和48年度に発足したのに対し、幼稚園については、「金銭教育はなじまない」「対象を広げるのは時期尚早である」などの消極論が一般的であった。しかし一方において、お金との関わりを持ち始める幼稚園児の段階から、金銭教育は始めるべきであるとの積極的意見が、金銭教育の研究実践と取り組んでいる小学校の先生方から、多く聞かれるようになった。

このため、制度化に先立ち、試行的研究がなされた。昭和62年、宮崎県高千穂幼稚園では、「物やお金を大切に、基本的習慣を育てる」ことを研究主題として、幼稚園における金銭教育の可能性について、研究実践を行った。2年間にわたる研究の結果、この教育が幼児に対しても十分効果を上げることが認められ、平成2年度から幼稚園も、金銭教育研究園として制度化されることとなった。

愛媛県の幼稚園は、平成6~7年度の金銭教育研究園である。研究推進に当たって、基本となる研究主題を「物やお金を大切に、やさしさと思いやりのある子どもを育てる。素直に『ありがとう』が言える子ども」と設定している。この研究主題は園児の日常生活で、「ありがとう」のひとことが素直に言えないということから設けられたものである。素直に「ありがとう」と言える感受性豊かな子どもに育てるに

3) 本論では、平成6~7年度の金銭教育研究校のうち平成8年7月に開催された全国金銭教育協議会に、発表校として参加した各校の研究実践事例を検討対象とした。資料:「金銭教育研究校の研究実践例集 全国金銭教育協議会発表校資料」平成8年7月 貯蓄広報中央委員会

は、物やお金を大切にすることを育てることから始めようとしたのである。

これは、金銭教育のねらいとする心情的側面を通して、感謝する心、思いやりの心を育て、豊かな人間性を培うという究極的目標に迫ろうとするものである。

長崎県U幼稚園では、研究主題を「幼稚園の自然の流れの中で、幼児がものを大切にすることを育む ものとかがかわる感動体験を通して」と決め、研究実践に取り組んでいる。

園内の遊びで使うものを、牛乳パックなど廃材を利用して自分で作ってみる、作り上げたことの喜びと感動を通して、物を大切にすることを態度が育まれていくのである。

(小学校) 各地の小学校が、金銭教育研究校として積み重ねてきた研究実践は、20年余に及んでいる。当初「金銭教育とは何か」学校として取り組む教育か」といった戸惑いが、いずれの学校においてもみられたのは事実である。そこで、学校が研究実践に当たってまず取り組んだのは、これらの疑問に対して共通理解に努めることであった。そのために相当の時間とエネルギーを費やすことは、止むをえないことであった。

そうした先進校の研究成果は、現在の研究校に生かされており、その上でさらに、金銭教育がめざす理念の深化・具体化に向けての努力が重ねられている。

佐賀県N小学校では、金銭教育を進めるに当たって「物やお金の価値を考え、大切にすることを子どもの育成」を研究主題とした。物やお金の価値を正しく知ることは、有限である資源や地球環境の大切さを知ることにもなり、さらに、自分たちの生活が、勤労の結果としての物やお金に支えられていることに気づかせ、健全な金銭感覚を育てることになるとの考えによるものである。

秋田県H小学校の研究課題は、「人の心や物を大切に、思いやりのある心豊かな子どもの育成」となっている。金銭教育としてお金を大切にすることというのは、働く両親に感謝すること

であり、そのお金によって手にすることのできた物を大切にすることであり、さらにそのことは、思いやりの心を大切にすることを教育と抑えている。

(中学校) 金銭教育研究校は小学校が中心で、中学校は約1割に止まっている。しかし、金銭にまつわる問題行動は、中学生に多く見られるところであり、この面からも、中学校における金銭教育の必要性は大きいと考えられる。ことに小学生と違って、豊かな感性や高い理解力をもつ中学生に対して、知的な面と心情的な面との両面から、健全な金銭観や価値観の形成に迫ることができれば、その効果もまた大きいものがあるといえよう。

宮城県S中学校の研究主題は「合理的な金銭感覚を身につけさせる指導の工夫」となっている。まず、金銭教育の目指す目標を明確に設定することが必要であるとして、金銭の機能の理解、健全な勤労観の育成、の二つを目標として絞り、この目標に迫ることによって「合理的な金銭感覚を身につけさせる」ことができるとしている。そのために、当校では、各教科、道徳、学級活動の時間を通じた総合単元的学習を展開している。

長野県R中学校では、学校として求める生徒像を「ものを大切に正しい金銭感覚で生活する生徒」「黙々と働く生徒」「ものの命の尊さを考え感謝や思いやりの心を持つ生徒」としている。この生徒像に迫るために、金銭教育の研究テーマを「ものやお金を大切に、豊かな心を持つ生徒を育てるにはどうしたらよいか 活動をとおして、感謝や思いやりの心を育もう」と決め、教育効果を上げている。

兵庫県M中学校では、金銭教育についてそれは、金銭を通して広く生き方を学ぶ教育であるとの共通理解のもとで、金銭教育の目標を「物や金銭に対する価値観を高め、感謝と自律の心を育てる」と掲げている。

当校の一生徒による「価値観」と題する作文がある。「今の時代はお金があれば何でもできるようになってしまったのだろうか。お金がこ

の世を支配してしまったようで本当にさみしい。このような環境で育った人はお金の価値が分からないまま大きくなっていくにちがいない。(中略)お金はどういう風に使うべきか、それが分かった時、やっとお金の価値も分かるだろう。そしてお金よりももっと大切な物を見つけた時に、お金の欲を持たなくなるだろうと思う。」味わうべき作文といえよう。

(2) 研究実践

金銭教育研究校は、それぞれの研究テーマにそって研究実践を行っている。そのいくつかの事例について、金銭教育のねらいとするところが、どのように関わっているかとの視点から検討してみたい。

(知的側面からのアプローチ)

物やお金の価値や役割を理解すること、そして物は金銭によって得られるものであり、その金銭は勤労の対価であること、これを教えることが金銭教育の原点であり、知的な側面からのアプローチである。

佐賀県N小学校の研究テーマは、「物やお金の価値を考え、大切に子どもを育成」ということである。この研究テーマのもとで、3年生を対象に「きゅうりの売上金について考えよう」との研究授業を行っている。

この授業は、畑で野菜を育てることから始まり、収穫したきゅうりを売って代金を得るという内容である。子どもたちが手にしたきゅうりの売上代金は5,000円、そこから苗や肥料などの費用2,194円を差し引いた利益は2,806円となる。そして、利益の2,806円を一人分にすると112円になることがわかる。

そこで子どもたちは考え、意見を出し合う。「夏休みの暑い中、いっしょうけんめい働いたのに、112円は安すぎる」「たったのジュース1本分だ」「私のおこづかいより少ない」「農家の人に聞いたら、こんなに安くては生活できんといった」というようなことが感想として出てくる。

こうして子どもたちは、体験を通して物やお金の価値ということを学んでいったのである。

山梨県T小学校では、3年生に対して、「1本のえんぴつの向こうに」とのテーマによる学習指導を行っている。子どもたちは、物を大切にしなさいとよく聞かされている。しかし、日常の行動と結びついていない。それは、物を大切にすることは具体的にどういうことか、十分な理解ができていないからであろう。

そこで、子どもたちにとって最も身近な鉛筆を取り上げ、その鉛筆の作られる過程を学ぶことによって、なぜ物を大切にしなければならないかということをし、しっかり理解させようとしている。

まず、鉛筆のシンとしてなくてはならない黒鉛は、スリランカの鉱山の地下300mのむし暑いところで、黒い粉を吸い込みながらとってくる。鉛筆のじくとなる、ふしがなく、木目がまっすぐなヒノキの木は、アメリカのネバダ山中で、きこりの人が朝3時半に起きて切ってくる。そうして、鉛筆の原料は日本に運ばれ、工場で製品となっていく。

1本の鉛筆には、数え切れない人達の働きがあること、それを知った子どもたちは物に対する価値観が育ち、なぜ物を大切にしなければならないか、ということがよく理解できるであろう。

(心情的側面からのアプローチ)

がまんすること、感謝すること、思いやること、いずれも子どもたちにとっての大切な資質である。健全な金銭観を育成することは、これらの豊かな人間性を育てることであり、金銭教育がねらいとする心情的側面である。

愛媛県O幼稚園では、素直に「ありがとう」と言える感性豊かな子どもの育成を目指している。子どもたちは、楽しい遊びを通して、多くのことを学んでいく。そこで、いろいろな遊び道具を使って十分に遊びきる喜びを味わせ、遊び終わった時には、上手な後かたづけをさせる。遊びとかたづけをしながら、物を大切に扱うこときれいにすることを教え、同時に「ありがとう」との言葉かけを、繰り返し指導している。それが習慣となって、素直に「ありがとう」と言えることは、「物やお金を大切にし、やさしさ

と思いやりのある子どもを育てる」という当園の研究課題に副うものである。

秋田県H小学校では、物やお金を大切にすることは、思いやりの心を大切にすることであると抑えている。全校児童による「こころぼかばが集会」では、リサイクルの意味や、自分のこづかいの使い方について、考えたり話し合ったりしている。アルミ缶はどうやってできるのか、リサイクルってなにか、などの勉強は、アルミ缶回収運動へと広がっていく。回収したアルミ缶は1トンに達し、これを車いす1台と交換して、町の社会福祉協議会に寄贈した。子どもたちは、物を大切にするとともに、人に対する思いやりの心も学んだのである。

3. 金銭教育の研究課題

金銭教育の普及・深化にとって、金銭教育研究校の果たす役割は大きい。研究校は、それぞれ「自由に研究を行う」ことになっているが、その場合に、金銭教育の理念・内容についての基本を抑え、十分な共通理解を図ること、ならびに学校教育の中での金銭教育の位置づけを明確にしておくことは、基本的な課題といえよう。

(1) 理念・内容の焦点化

教育は、人格の完成をめざし(教育基本法)、人間性豊かな児童生徒を育てること(教育課程審議会答申)をねらいとする。この究極的目標に向けて、それぞれの基本的目標をもった教育が展開されている。金銭教育は、教育一般が最終的なねらいとする人格の形成、豊かな人間性育成の、いわば、経済的側面を担うものである。⁴⁾

つまり、金銭教育は、物や金銭を媒体として、

子どもたちの健全な金銭感覚を育てることによって、教育の最終目標に迫ろうとするものである。

この理念のもとに、教育の現場で進める実践方法は多岐にわたるであろう。学級活動の一環として、きゅうりの売上金を通して金銭の価値ということを学んだ佐賀県のN小学校、道徳の学習で1本の鉛筆を取り上げて、物に対する価値観を育てようとした山梨県のT小学校などの事例は、いずれも金銭教育の理念を明確に抑え、たうえで取り組んだ、すぐれた研究実践といえよう。

ただ、物や金銭に関わる指導は、視点を異にして広く展開されている。小学校6年生の家庭科では、「上手な買物」について学習する。また、「金銭の使い方と記録の仕方を工夫する」ということで「こづかい帳の記帳」について指導する。それが、「賢い消費者」を育てるためにどの視点でとらえれば、それは消費者教育の分野ということになる。

あるいはまた、「勤労の尊さや生産の喜びを体得するとともに、社会奉仕の精神を涵養する体験が得られるような活動を行うこと」ということで、学校行事として廃品回収を行い、その回収代金を福祉施設に寄贈する。これを環境教育、福祉教育という視点でとらえることもできよう。

いずれも、物や金銭からむ大事な教育である。しかし、それが金銭教育であるためには、金銭教育が目指すところの理念と、その内容をしっかりおさえ、焦点化することが肝要である。

(2) 位置づけの明確化

学校には、それぞれ学校の実態に則して設けられた教育目標がある。この目標を達成するた

4) 国立教育研究所長であった平塚益徳氏は、何人にも要求される教育上の大目標、つまり教育における不易の面として、七つの柱をあげている。ホモ・サピエンス(理性的人間)、ホモ・パティエンス(宗教的人間)、ホモ・ファールベル(工作的人間)、ホモ・ルーデンス(スポーツ、芸術に楽しむ人間)、ホモ・エコノミクス(経済的人間)、ホモ・ポリティクス(政治的人間)、ホモ・コンコルス(調和的人間)がそれである。

そして、「金銭教育の根本的なねらいは、人間存在の基本的要請たる『ホモ・エコノミクス』の本質に深くかわるもの」と述べている。

「こどもの金銭教育」(昭和53年7月)貯蓄広報中央委員会

「わが家の金銭教育」(昭和55年7月)貯蓄広報中央委員会

めに、全教育活動を通して、教師が意図的・計画的に指導していくのが学校の教育といえる。

金銭教育を学校で進める場合には、この学校の教育目標を具体化し、焦点化していく実践の場として取り上げることができる。

先の山梨県T小学校では、「知・徳・体の調和のある豊かな人間性と、たくましく生きる力を身につけた子どもの育成」を学校の教育目標として掲げ、この目標はさらに「進んで学び、創造性のある子ども」「よく考えて、積極的に行動する子ども」など五つの具体的目標に分けられる。当校が、金銭教育の研究主題を「自ら学び、創造的に活動する子どもの育成」と設定したのは、金銭や物を大切にす指導を行うことによって、正しい価値観に基づいた判断力・思考力を育て、学校目標としての創造性豊かな子ども像に迫ろうとしているからに外ならない。

また、秋田県H小学校が、学校教育目標の一つである「思いやりの心で物事を考え協調して生きる子ども」との関連で、金銭教育の研究主題を「人の心や物を大切に思いやりのある心豊かな子どもの育成」としている。

両校とも、金銭教育を学校教育目標の中にきちっと位置づけて、研究実践と取り組んでおり、一貫性をもったその教育効果は確かなものといえよう。

(3) 研究の効率化

金銭教育研究校のこれまで20年余にわたる研究実績は、貴重な資産である。新たに研究校として、研究実践に取り組む学校は、まずこれら先進校の業績について学ぶことである。その上で、さらに研究を深めていくことが効率的といえる。

かつての研究校では、「金銭教育とは何か」「学校として取り組むかどうか」という議論のうちに、最初の1年が過ぎてしまった、ということもまみられた。先生がたが十分納得するまで議論を重ね、共通理解のもとで研究に取り組むことも大事である。しかし、そのために貴重な

多くの時間、労力を費やすことはいかなるものであろうか。

佐賀県N小学校では、3年間の「金銭教育研究校の研究実践例集」によって、先進校の事例を学習、その上で具体的な生活指導年間計画の作成にかかっている。

兵庫県M中学校では、先進校の研究の中に多くの課題が提起されているとし、それらを参考にしながら、研究の方向性を模索していったという。

いずれも、先進校の成果をふまえての、効率的な実りの多い研究といえよう。

ただし、金銭に対する意識、態度は、生活環境等の違いによって、必ずしも同じものとはいえない。例えば、幼稚園児に対し、10円貨と100円貨を見せて、「たくさんほしいものが買えるのは、どちらのお金ですか」と質問をしたところ、その反応は市の中心部の幼稚園と、周辺部の幼稚園とでは、明らかな違いが見られる。⁵⁾

従って、先進校に学ぶとともに、それぞれの学校が置かれた環境、子どもの生活実態に目を向けることもまた大切なことといえよう。

おわりに

人がどのような金銭観をもっているかは、その人の人格に深く関わってくる。それだけに、健全な金銭観というものを、子どものうちからしっかり育てていこうとする金銭教育の意義は大きく、これを教育の現場で進めている金銭教育研究校の役割もまた大きい。

各地で、地道に使命感を持って、研究実践に取り組んでおられる先生がたに、深い敬意を表するとともに、全国金銭教育協議会に参加する機会を与えていただいた貯蓄広報中央委員会の皆さんに厚くお礼を申し上げたい。

金銭教育関係資料一覧

貯蓄広報中央委員会発行

こどもの金銭教育	1978. 7
金銭教育をいかに進めるか（ ）～（ ）	1979. 7～83. 7
わが家の金銭教育	1980. 7
こどもとお金	1981. 5
学校における金銭教育の進め方	1982. 4
学校における金銭教育	1983. 12
日本の教育に欠けたるもの	1984. 9
金銭教育研究校の研究実践例集	1984. 7～
金銭教育の考え方・進め方	1984. 9
今，なぜ金銭教育か（オートスライド）	1985. 5
学校における金銭教育の実践原理	1985. 8
こどもとお金（オートスライド）	1986. 7
金銭教育概説	1986. 7
くらしとお金	1987. 3
金銭教育の進め方 新学習指導要領を踏まえて	1990. 3
金銭教育研究校参考資料（幼稚園用）	1990. 6
A Guide to Money & Card	1993. 4
お金やカードについてかんがえてみよう	
IF YOU HAVE ¥1,000,000	1993. 9
100万円あったら，どうする？	
中学校におけるお金やカードの学習	1994. 4
先生のための手引書	